

「実践事例集Vol.13」(2016年4月発行)で
紹介している事例を中心に抜粋しています。

(公益財団法人 ソニー教育財団)

ソニー幼児教育支援プログラム 幼児教育 保育実践事例サイト
<http://www.sony-ef.or.jp/sef/preschool/>

実践事例集

<http://www.sony-ef.or.jp/sef/preschool/practice/>

主体的・意欲的に遊ぶ中で育つ “科学する心”



あっ、
かにさん みつけた!



そ~っと、そ~っと...
ふうーうっ!

滋賀県犬上郡甲良町立

甲良東保育センターあおぞら園

(甲良第一保育園・甲良東幼稚園)

1. はじめに

あそびはもちろんのこと、園生活のすべてにおいて、子どもたちが「自分の生活をつくるのは自分自身！」という実感をもって毎日を過ごすこと。朝、登園してから給食（クラス会）までの午前中の時間を、子どもたち自身がめいっばい自分達で考えて活動する、そんな毎日を保障すること。そんな『あそび・生活の主体は子ども』ということをも園の全職員が共通理解し、日々の保育や生活の在り方、環境の見直しを行うとともに、保育者はその重要な役割をもつと認識し、保育者の環境としての姿、立ち位置はどうあるべきかについて研究を深めるため「事例の記録・検討」に取り組んで4年目になる。そして、研究を進める中で、「主体的に活動する乳幼児期の生活」を支えるには、保育者の在り方が大きくかわるのだということが見えてきた。

【研究主題】まわりの物事に心動かされ、自らかかわって主体的に活動していく“乳幼児期の生活”

土 台

見直しと取り組み
の積み重ね

安心して落ち着いて暮らせる生活空間

- 自然がある。
- 装飾は子どもたちの作品が中心。
- 生活の場からあそびの場へ流れるような保育室環境

かかわりたくなる環境や出来事があり、仲間と共に考えたり工夫したり、思うように関われる毎日

- 保育者の思い（育てたい願い）がある環境。
- 子どもがやりたい、頑張りたいという思いを実現できる生活。
- ひととかがわり合い、考え合いながら変えていける毎日

今日一日（出来事や流れ）が見通せる生活

- 生活習慣の方法や手順が変わらない。
- 行事や出来事が自分達でわかる。
- 自分達で先を見通してつくれる生活。

支えるのは保育者の在り方（立位置）

生活の外側から子どもたちを指導・指示したり見守るのではなく、同じ生活者として一緒に活動する関係の中で、子どもの思いにしっかり耳を傾け、保育者も子どもたちに願い（思い）を伝えながら、よりよい生活（あそび）を共につくっていく存在であること。

“あそびの面白さを思い切り共感し合う遊び仲間としての存在”（3歳児）、“困った時、こじれそうになったときに調整役として援助してくれる存在”（4歳児）そして、“子どもたちの主体的な生活”を脇からそっと援助する存在“（5歳児）へ

研究を進める中で見えてきたこと

(中 略)

園のあちこちで「面白そう！ やってみたい」と心揺れる出来事に会い、思い思いの方法で繰り返しかわり、主体的に活動している子どもたち。そんな姿を記録し、その中にある探求心の芽生えや深まり、そして、それを支える保育者の在り様を“小さな事例”として溜め込み、全職員がその事例を報告・協議して研究を重ねている。その事例の中から検証してみることにした。

事例1「ピワって、めっちゃ おいしい！」(5歳児)

園庭の隅にあるピワの木の下に落ちていた緑の実を見つけて、外用のままごとナイフで実を切ってみる男の子たち。

「固いで、なかなか切れへんな」

「ごしごし やってみ！」

(切ってみて)「中は黄色や！」 「真ん中に 種があるな」

「外(皮)は緑やけど、中は黄色や」 と言いながら種を集め始めた。種を植えて増やそうと相談。きりんぐみ会で、

きっかけ

「こんな実 見つけて切ったら、中はこうなってた」(と、ナイフで切った実をみんなに見せる)

「この実、なんの実か知ってる？」

「ピワの実 ちゃう？」 「たぶん、そうやで。ピワやで」

「ピワって、どんなの？」

「あんな、オレンジ色で中に種があるん」

「でも、これ、緑色やで」

「だんだん オレンジになるんやで」

ピワの実への
関心が広がる

こんなやりとりがあり、この日からピワの実に関心を持ち始めた子どもたちは、毎日、ピワの木に登ったりして、緑のピワを採ってきてはナイフで切ったりしている。

そんな様子を見て、子どもたちの中から、

「緑色のは とったらあかん」「緑色の採ったら黄色にならへんやん」「黄色にならな食べられへん！」

「黄色になるまで とらんとこう！」という声。

ふたたび、きりんぐみ会で話し合い、みんなで「緑のピワはとらないでおこう」と確認しあった。

それからは、誰ということなく子どもたち同士で“ピワの実”の確認が始まった。

「あっ、黄色くなってきてる！ もうそろそろ食べられるんちがう？」

「じゃあ、そろそろ ピワとりしよう！」 6月4日に「ピワとりをしよう」ということになった。

6月4日(木)

園庭に飛び出して、ピワの木に行き、木登りして採ろうとしたり、棒を使って採ろうとしたり、木をゆすったりし始めた。

木登りで採っていた子どもたちは交替で登っては手が届く実を採っている。棒や箒、虫捕り網を使って、たたいて落とそうとするがなかなか思うように採れない。

考えて、試してみる





「あっ、はしごや!」「はしご 持ってきたらいい!」
 はしごを持ってきて、順番に黄色の実を採って、早速、洗って食べ始めた子どもたち。
 「めっちゃ おいしい!」
 「種がはいってる」
 「すっばい! みかんの味する!」

この日は保育者がはしごを持って、ピワの実が採れるように動かしていた。

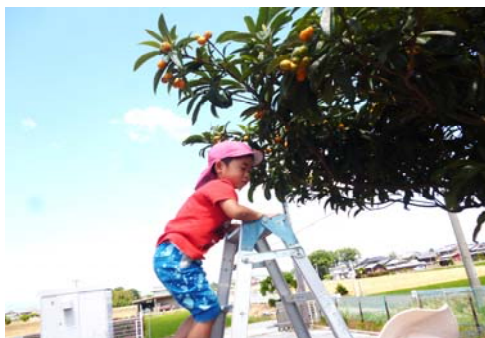
6月10日(水)

毎日、ピワ採りは続いた。その中でどんな実が美味しいのかわかってきたようで、緑っぽいピワは採らずに残してる姿が見られる。木の下の方の実が無くなってきて、木登りではなかなか採れなくなってきた。

経験したことを活かして(高まり)

「そうや、はしごをもってこよう!」

今日は、自分たちではしごを持ち出し、黄色く色づいたピワの実の下あたりに はしごを移動させては実を採っている。



しかし、大変な事件が!

美味しそうなピワを狙ってカラスがやってきていた。「全部、食べられてしまう!」

そこで、その日の午後、カラスに食べられる前にピワを採ろうということになった。

みんなで協力し合い、いっぱい採ることができた。

「すごい、いっぱい!」

「いったい、何個 とれたんやろ?」

子どもたちは収穫したピワの実をテラスで一個一個、数えはじめる。

「1、2、3…」手で押さえながら数えても、ころころと転がったり、いくつ数えたのかわからなくなってしまう。

みんなで食べて、大満足。むいた皮はボウルに集めて、色水あそびに。大きくて美味しそうなピワを選んで、去年の担任のところへ持っていき、「先生も食べい。美味しいよ」と差し出す子もいた。



友達と協力しながら、一つ、一つ、数えていく子どもたち。

「もう わからへん。 どうしよう…」

保育者の援助

そこで、卵パックを出してみる。

早速、卵パックにビワの実を入れて数え始める。

「いっぱいやなあ」（たちまち10個が埋まってしまう）

「腐ってるのもある」「黒いところがあるのもあるで」

「これは大きいけど、こっちは小さいな」

「色もちがうで！」

一つ一つ、パックに入れていくことで、ビワの実をじっくり観察し、同じビワでも色や形など、違いがあることに気づいていく。



どんどん、卵パックはビワの実で埋まっていく。



このビワ、大きいなあ…。

数え方を工夫する（高まり）

「10個が10個で…100」と数えたり、「2、4、6…」と数えるなど、数え方はいろいろだったが、全部で“209個”まで数えることができた。



同じ（びわ）だけど… “ちがう”
ことを発見！（新たな気づき・深まり）

「やった～！！」…達成感！

考察

偶然に見つけた緑色の、まだ若いビワの実から始まった“ビワの収穫”。クラス会議でみんなに知らせることでクラス全体の活動に広がった。

「黄色くなっていないと美味しくない」ことを実際に緑色のビワの実を半分に切って確かめた子どもたちは、毎日、木をながめながら、美味しそうに実ったビワを収穫してはみんなで食べていた。

何日かたったある日、そばを通った保育者に「先生、もう、もっともっと上の、奥の上の方じゃないと美味しい実がないと思うんよ。だから、はしごで登って採らないとあかんの」と教えてくれた。

美味しく楽しい体験。その中で子どもたちは「はしごを使う」こと、そのはしごを“どの位置に置けばいいかを習得”し、“的を得た場所に設置”していく。そして、“収穫するものとはしごを支えるもの、協力が生まれ、その協力で目標を達成”する。

また、収穫した“ビワの実”を数える中で、「“10”という数（卵パック）を利用すればわかりやすいこと（“10”のかたまり）」、「ビワの実一つ一つを観察するということ」、そして、「同じ“ビワ”でも、いろいろな形や大きさ、傷などちがいがあること」、「ちがいがあってもやっぱり“ビワ”にはかわりないこと」…など、いろいろなことを次々と学んでいくのだと実感した。

「ビワを採りたい」…心が動いたことを仲間に伝え、一緒にやってみる。

「どうしたら採れるかな？」…考え工夫して友達と協力しながら試してみる。

「ビワの数をかぞえよう」⇒「卵パックを使う」・「大きさ・形がちがう」…**新たな発見！**

----- 深 ま り ----->

事例2「これ やってみたい。やらな、わからへんやん！」(4歳児)

4月、5月と、園庭に出れば“ダンゴ虫さがし”に夢中になる子どもたち。

「家を作るねん。」と、飼育ケースに集めてくるのはいいが、水をたっぷり入れたり、ダンゴ虫が埋まってしまうほどの砂を入れたりする毎日が続いていた。

「ほら、見てみ。苦しうやで」と声をかけるが、繰り返してしまう子どもたちにどうしたら伝わるのだろうと悩んでいた。

保育者の援助

それでも夢中になって虫つかみを楽しむ姿があったため、保育室に“ルーペ”を置いてみた。すると、男児が中心になってのあそびだったのが、女兒たちもルーペに興味をもち、園庭の虫探しが広まった。

みんなで園庭中のプランターを動かし、“ダンゴ虫”をカップに集め、観察し始める。

えるあ「いつも見ている本にダンゴ虫 書いてたな！

オスとメスがいるんやんな！」

(降園時、待っている時にいつも見ていた昆虫の本に“ダンゴ虫”のことが載っていたことを思い出したようだ。)

えるあと一緒に周りにいた子どもたちが走って本を取りに行く。

気づき



ルーペだと細かいところもよく見える。

絵本を見て、背中に黄色い点があるほうがメスだと知った子どもたち。ルーペで確認しながらカップの中で探し、分け始めるが混ざってしまい、わからなくなってしまふ。

ゆな「一緒のところに入れたら分

からんから、お皿持ってきたで」

3色のお皿に、オス、メス、赤ちゃんと分け始める。

気づき



えるあ「(ルーペで観察しながら)これはオス」(黄色の皿へ。)

れんや「これは、どっち？」 えるあ「メス。」と、オレンジ色の皿へ。



経験を活かす(高まり)

赤ちゃんはまだ模様ははっきりしないため、オスとメスの区別が付きにくい。そこで、赤ちゃんはピンクの皿へ。このことも、毎日、お帰りのときに見ていた絵本で知っていた子どもたち。

えるあ「あおぞら園のダンゴ虫はオスばっかしやな」

一匹一匹をルーペで確認しながら分類していく。

保育者の援助

そんな子どもたちの姿に、図書館で何冊かダンゴ虫の本を借り、翌日、テラスに出しておくことにした。

翌朝

えるあ「これ、普通のダンゴ虫とちがう！」 保「なんで わかるん？」
えるあ「背中がまっすぐやろ。見てみ！」 保「なんて名前やろうな…」

本の写真とダンゴ虫を見比べながら名前を探していたえるあが発見。

えるあ「これや！ なんて書いてるん？」 保「ワラジムシって書いてるわ」

本の続きを見ていくと…**実験のページを発見！**

保育者の援助

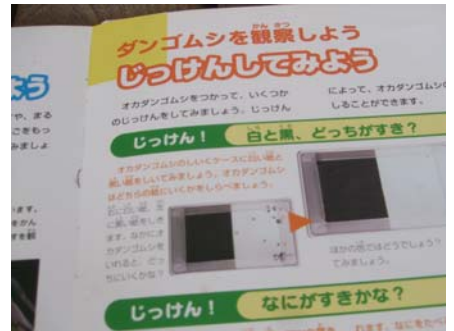
「ダンゴ虫にも 好きな色があるんやって。えるあ君は、“白”と“黒”、どっちが好きやと思う？」

えるあ「黒！ だって、かっこいいから」 保「どっちなんやろなあ…」

えるあ「これ、やってみたい！ やらな わからへんやん」

やってみる！（探求心）

担任と一緒に箱を探しに行き、実験箱を作ったえるあ。
捕まえたダンゴ虫を実験箱に入れ、早速、観察を始める。すると、
ダンゴ虫は白色の方に集まってくる。



えるあ「白、いっぱいいる！
なんでやろ？」

自分が思っていた結果と違ったため、少し残念そうな様子。

ゆながやって来てのそきこみ、

ゆな「でも、黒にもいるで。

（黒も白も）両方ともはしっこ
にいるから、ダンゴ虫、はし
っこが好きなんちゃう？」



ダンゴ虫の本には“黒”に集まると書いてあり、自分の予想とも
違ったが、試してみて、ゆなの意見も聞いて納得した様子だった。

仮説を立てている。

その後も…

このことをきっかけに、えるあは本で知ったことを「本当か、自分で
調べてみたい」と、何日も集中して確かめていく。

繰り返し挑戦（深まる）

ダンゴ虫のお腹の方も観察するようになり、お腹に卵がたくさん付いているメスや、赤ちゃんが
お腹から出ようとしているところも発見した。

その後もルーペでいろいろな虫を観察する子どもたち。
ダンゴ虫の観察がきっかけになり、様々な生き物の特徴に
気づいたり、次第に“飼育ケースに水や砂を入れる”とい
うこともなくなった。

- かに・カエル・おたまじゃくし
⇒ 水を入れる。
- ダンゴ虫・幼虫など
⇒ 土、枯れ葉、木の枝などを
入れる。

また、生き物によって生きている場所の違いにも気づき、
その生き物が棲みやすい環境を工夫する姿が見られるよう
になった。

新たな気づき・生き物
へのかかわりの変化
（深まり・高まり）

考 察

子どもたちにとって身近で大好きな“ダンゴ虫”だったが、そのかわり方が気になり、ルーペを環境の中に取り入れることで、その関心は深まり、その姿からさらに図鑑を環境に入れてみた。

そんな保育者の働きかけがきっかけとなり、子どもたちの興味・関心は

「やってみたい！ やらな わからへんやん！」(探究心)へと、大きく膨らんでいった。

子どもたちは実際に自分で確かめていく中でいろいろなことに気づき、生き物に対する接し方(行動)が変わっていく。(高まり・深まり)

保育者は、子どもたちの行動に(“ダンゴ虫をちゃんとあつかって欲しい”という)願いをもって環境を整えていくとともに、子どもの思いに寄り添い、“やりたい”ことを実現できるように共に考えたり、工夫したりしていくという姿勢が本当に重要なのだとあらためて痛感した出来事だった。

事例3「なんか、音がするで!!」(3歳児)

6月24日(水)

砂場の日よけのところに暑さを和らげるためにミストを設置した。ミストにホースを取り付け水を流すと、ホースを伝って水滴が落ちてきた。

砂場で遊んでいた子どもたちが、その水滴に気がつき、

「あ、なんか落ちてきた！」

「おもしろいなあ」と、ホースを見上げる。

手に持っていた砂場のおもちゃ、鍋に水滴があたって驚く子どもたち。

気づき(心が動く)



頭に水滴がかからないよう鍋を帽子のようにして掲げたまさなりが「なんか、音がするで!!」

新たな気づき

かけるは持っていた鍋に水滴を受けている。少しずつ水が増えていく。まさなりを見て、鍋を裏返し「ほんまや、音 する!!」

他の水滴が落ちるところを探し、かなとも丸い鍋で受ける。

おうかはペットボトルで水滴を受けようとする。そうしはプラスチックの入れ物を探してきた。



「どんな音?」「これに集めたらどうなるかな?」
…とんどん確かめていく。
(高まり)

繰り返し、挑戦

「やっぱり、こっちにしようかな」「はいらへんなあ」

ペットボトルの口になかなか水滴が入らず、今度はザルを選んで持ってきた おうか。まさなりはもう一度、水滴が鍋に当たる音が聞きたいようで、鍋を裏にしてかぶったり、また、表に返して何度も音の違いを試している。

かなとは丸い鍋から四角いフライパンに変えて水滴を受け、水がたまる様子を試している。次はそのフライパンを頭の上に乗せて…「音、する！」



水しずく、ザルに入れたらどうなるかな？



「これは どうかな?」「これでもしよう!」「かぶったら音する!」…子どもたちは思いも寄らない方法で次から次へと、どんどん確かめていく。



「おもしろい!」「これでもためしてみよう!」…これも、あれも、ためたいことがいっぱいの子どもたち。(探求心)



「ほくも やりたい!」どんどん子どもたちが集って…。実験に没頭する小さな科学者たち。

6月30日 (火)

今日もミストのホースからは水滴が漏れている。砂場で川づくりを楽しんでいた ひろみとひさと。



大きいくみさんがしていた砂遊びを見て「ほくたちも あれ(樋のこと)がほしい」と言ってた3歳児の子どもたち。3歳児が扱いやすいように、少し短めに切った樋を置くと、早速、つなげて砂遊びに夢中。



ミストの水、発見!

ほのみも加わって、三人はスコップやジョウロで水滴を集めて、たまった水を川へ流していく。

お水、すぐにたまるかな…
(小さいスコップでためすひさと)

大きいスコップやと、水がはねるで!!

ジョウロに水をためていたほのみ。たくさんたまると、その水を砂場の川に流していく。まるで、水の循環を見ているような感じで繰り返していた。



7月1日(水)

この日もミストのところに子どもたちがやってくる。今日は、せおとないとが「ぼくたちも たしかめるぞ」と言わんばかりに、水滴の真下に椅子を運び、金物のままごと茶わんを持ってきた。

“ぴちゃぴちゃ” “ぽつぽつ” 二人にはどんなふうに聞こえているのだろう。“水滴”と“金物”という素材とのハーモニー、心地よい音色やリズムに笑いが止まらない二人だった。



考察

暑さを和らげることを目的に取り付けたミスト。そこで、“水滴”という、子どもたちにとってとても魅力的な素材と出会う(気づき)ことに。大人なら見落とすような、この“水滴の出来事”に、子どもたちはとても新鮮な眼差しを向け、心を動かす。

そして…「これもためしたい」「もっと、やってみたい」と、色々なもので試していく(繰り返し挑戦)。それが、次には、この水滴を集めてあそびに使おうとしたり(高まり)、「これなら、きっとおもしろいぞ」…そう思った素材(金具)を持ち出し、水滴の落ちる場所を定めて試すことを楽しんでいく(深まり)。

一つのきっかけ(気づき)からどんどん、臆することなく行動する姿は、“自分ってすごいよ!”と、結果がどうであるかということよりも、自分でやりたい気持ちがいっぱいの子供らしい姿だと実感した。

このような3歳児の周りの世界への興味・関心と行動力が4歳児・5歳児の学び「科学する心」の土台になっていくのだと考える。

幼児期の学びを支える0・1・2歳児期

みみず発見！



これ！
みみず。



棒なら大丈夫。
つんつん…



触りたいけど…
こわい。

ほんまや！
みみずいたあ。



みみずさん、
いっぱいや！



みみず、いるなあ。
大きい水槽に入れたるでな。

「大きな水槽に入れるんよ。」玄関の観察ケースまで運ぶ子どもたち。よしよ、よしよ…



捕まえたみみずを必死でみんなでケースの中に…



2歳児の子どもたちは小動物に興味津々。

「はいりたいな…」が伝染していく！



「入りたいな…」
「入ってもいいよ」保育者の言葉に嬉しそうに、そそっと足を川（水）の中へ…

一人増え…



「ほくも…！！」
気持ちいいね。

また一人…



「わたしも！！」

いつもの散歩道。どこに何があるのか、ちゃんとわかっている1歳児。

そして…



み～んな
はいっちゃった！

0歳児さんも…

思わずテラスへ…

風さん もっとふいて～！



風鈴の音色に「あれえ？」
風車も回ってる！



まわりの自然を全身で感じている0歳児。（風鈴や風車は身近に風を感じてほしいと願う保育者からの環境）

(後略)